

日蓮聖人の「依正不二」観について

松 脇 行 真

はじめに

日蓮聖人（以下、聖人と略称）は『撰時抄』に於て「三度の高名」を「法華經の一念三千と申大事の法門」（一〇五四頁）と示され、また『富木入道殿御返事』では、聖人の一念三千の特徴を「大難又色まさる」との法華經色説に当てられている。つまり、法華經に説示されている法華經弘通による迫害が、天台・伝教の像法時に比べ、末法の今日、聖人の方が勝ぐれていると提示され天台・伝教を「迹門・理一念三千」、聖人を「本門・事一念三千」（一五二二頁）として対比されているのである。

そして、聖人が「本門・事一念三千」と教示される三度の国家諫暁は『立正安国論』に端を発し、また、種々の迫害に値うことにより、法華經の行者、そして仏使上

行の自覚に至る条件である法華經色説の契機もまた『立正安国論』上奏なのである。ここに聖人の宗教体験の起点と特質が『立正安国論』に在り、それが聖人の一念三千と関わりを持っていることが伺えると思われるのである。

この『立正安国論』と聖人の一念三千との関係について、茂田井教亨先生は

『安国論』の思想的根底となるものに、能具の一念の心の信（善）不信（悪）によって、所具の国土世間にもまた善悪を生ずるといふ依正不二の考え方がある（1）。

と述べられ、『立正安国論』と聖人の一念三千を結びものとして、「依正不二」という考え方が存在することを指摘されている。

そこで小稿では、聖人の一念三千と『立正安国論』と

の関係の、謂わば結論である依正不二という考え方を指標とし、それを聖人の「依正不二」観として受け止め、そこからもう一度聖人の宗教の特質を探るべく考察を試みようと思うのである。

一

「依正不二」は、妙楽大師湛然の『法華玄義釈籤』十四に、迹門十妙を積した後の段で、その十妙を別の見地より十門に分けて解説したものの第六番目に説示している。

その文中に

以三千中生陰二千為正。国土二千属依。依正既居二心。

とある如く、一念三千中の三千世間を依正に配すれば、衆生世間と五陰世間の二千を正報に、国土世間の一千を依報として、しかもこの依正は一心にあり、不二であるという。つまり、正報である我々衆生の身心と、その正報の依止する環境である国土は、互に相依相関し合いながらも一心にあり、一体不二とするのである。ここで、一念三千の法数中に、衆生・五陰・国土の三千世間が含有されていることを以って「依正不二」を論じているの

である。いっぽう『摩訶止観輔行伝弘決』にも、「当知身土一念三千」⁽³⁾として、身土の一念三千に注目しており、依正を身土として、衆生・五陰世間と国土世間との連関を強調する一念三千観に立っているのである。これは、妙楽大師が天台大師の教学の根本理念を依正不二・一念三千であると理解していた為であろう。

ところで、「依正不二」という語句は、聖人遺文中、真蹟現存、曾存及び直弟子写本の現存中には管見の限りでは見受けられない⁽⁴⁾が、「依正不二」の考え方は『瑞相御書』に

夫十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のごとし、正報は体のごとし。身なくば影なし、正報なくば依報なし。又正報をば依報をもて此をつくる。

(八七三頁)

とあり、依報・正報を十方の国土と衆生に配し、体と影の譬えを用いて明確に述べられているのである。

また、最初期の遺文である『戒体即身成仏義』には
法華の覚を得る時、我等が色心生滅の身即不生不滅也。国土も如爾。

法華経の悟と申は、此国土と我等が身と釈迦如来の御舍利と一と知也。(一四頁)

とあり、一念三千の語は使用されてなくとも、「依正不二」という考え方が聖人の宗教の初期より存在していたことが伺えると思われる(5)。

次に聖人の「依正不二」観について少しく考察を加えてみる。

二

まず聖人は、依報である国土と、正報たる衆生との関連を、吉瑞・凶瑞としてみておられる。『守護国家論』に

祈三世間安穩、而国起三災、可知惡法流布故。(一六頁)

と、三災は「惡法流布」の故と示され、『立正安国論』(二〇九頁)に「世皆背正、人悉歸惡」、「妄信邪說、不弁正教」故に、「災起難起」、「成災致難」と示されている。同様の説示は『災難興起由来』(一五八頁)

『災難対治鈔』(一六三頁)等にも見ることがができる。

さらに別の表現としては、『法華取要抄』には「天隕人有失也。」(八一八頁)とあり、『法蓮鈔』には「天地は国の明鏡也。」(九五五頁)とあり、また、『撰時抄』には「天の御けしきいかりすくなからず」(一〇五三、四頁)と述べられ、依報を「天」と「天地」として、そ

の状態は正報の善悪によるといっているのである。

ところが、『立正安国論』撰述の直接的な原因である正嘉元年の大地震(6)は『富木入道殿御返事』(五一六頁)では、一大事の秘法の弘まるべき「大瑞」と転換され、『法華取要抄』(八一二頁)では法華経流布の「先相」とされているのである。また『観心本尊抄』(七二〇頁)では地涌の大菩薩出現の「先兆」とも見なされている。つまり、同一の自然現象を、一面では「凶瑞」とされ、一面では「吉瑞」とされるといふ一見矛盾した論理を展開される。これは、聖人が自然現象や国土のありさまを、経説が具現化した「現証」(?)として受け止められたためである。「凶瑞」とみられたのは『金光明経』等の諸経説に依ったものであり、「吉瑞」とみられたのは、神力品の「現無量神力」の経説、「仏使出現の瑞相」とは同じく神力品の地動瑞、「地皆六種動」の経説である。また『呵責謗法滅罪鈔』(七八五頁)では序品の「六瑞」、涌出品の「大瑞」たる「地皆震裂」の経説に依っているのである。このように聖人は、吉・凶共に経文と現証との一致として促えられたのである。

ここに於て、依報である国土の災難は、正報である衆生の謗法が招いた災いであるとともに、正報の中に法華

經の実踐者たる聖人が出現したため、法華經説示の通り瑞相として依報が現象を起こしたと認識され、そこに「依正不二」觀の特色が見出されるのである。

三

次に、衆生が正法である法華經に帰入することによりその国土もまた淨土と成ると説示されていることが挙げられる。

『守護国家論』には、「法華經修行者可期淨土耶」との問いに答えて、「我常在此娑婆世界」「我常住於此」「我此土安穩」と寿量品の文を挙げ

如此文者本地久成円仏在此世界。捨此土可願何土乎。故法華經修行者所住之処可思淨土。(一二九頁)

と述べられて法華經修行者(正報)の住処(依報)即淨土であると示されている。また『開目抄』では、仏の発迹顯本により、

今爾前迹門にして十方を淨土とがう(号)して、此土を穢土ととかれしを打かへして、此土は本土となり、十方淨土は垂迹の穢土となる。(五七六頁)

という娑婆世界中心の仏土觀を示され、さらに『觀心本

尊抄』では、

能変教主入涅槃。所変諸仏隨滅尽。土又以如是。今本時娑婆世界離三災。出三四劫常住淨土。仏既過去不滅未來不再生。所化以同体。此即己心三千具足三種世間也。(七二二頁)

とし、寿量顯本の当初に娑婆が本国土として成立し、十方の淨土は本仏所住の本土である娑婆に対すれば、迹仏所住の迹土となることが説示されている。この兩抄は、法華經、本仏積尊の超勝性を示すと共に、娑婆世界の絶對性を強調し、延いては、衆生(正報)国土(依報)の成仏の原理の問題が内在していると思われる。そしてここでは一念三千の依正不二を原理として、娑婆は常住の本土、仏は常住の本仏、衆生も常住の本化として一体不二であることを示していると思われる(8)。そのことは、四十五字段が、所觀本尊段の前の能觀題目段の最後に位置された、「當知身土一念三千。故成道時稱此本理。一身一念遍於法界。」(七一二頁)との依正不二を示した妙案の文との親近性(9)からも伺えるのである。また、積尊因果具足の妙法五字の受持(三十三字段)という正報の立場で述べられていたものが、この妙案の「身土一念三千」の文を起点として、依報の仏国土觀(四十

五字段)に推移し、さらに後には本尊の相貌を示されるのである。

ここに、「依正不二」観を側面に持った、聖人の一念三千が認められると思われる。

さらに、この娑婆本国土と「依正不二」観の関係は『一生成仏鈔』の

衆生の心けがるれば土もけがれ、心清ければ土も清しとして、浄土と云ひ穢土と云も土に二の隔なし。只我等が心の善悪によると見えたり。(四三頁)

により明示され、『如説修行鈔』の

天下万民諸乘一仏乗と成て妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱奉らば、吹風杖をならさず、雨壤を不砕。代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理頭れん時を各各御覽ぜよ。現世安穩の証文不レ可有レ疑者也。(七三三頁)

として、唱題流布による天下の安穩を示されているが、その帰結する処は、

汝早改三信仰之寸心、速帰三実乗之二善。然則三界皆仏国也。仏国其衰哉。十方悉宝土也。宝土何壊哉。国無衰微、土無破壊、身是安全、心是禅定。此詞此

言可レ信可レ崇矣。(二二六頁)

との『立正安国論』の文であり、衆生の信仰を「実乗之一善」に改心することにより、「三界皆仏国・十方悉宝土」との仏国土が顕現し、それが「国・土」に「衰微・破壊」なく流布した時に、「身・心」の「安全・禅定」が実現するのであると示され、もって、正報の心の善(実乗之一善たる法華経への帰入)と悪(謗法)とにより、国土世間もまた善(仏国土化)悪(災難統出)を生じるという「依正不二」観が確認できるのである。さらに、「此詞此言可信可崇」として、その「依正不二」なることを信ぜよと説示されたことも見落すことはできないのである。

おわりに

以上、甚だ概略的ではあるが、聖人の宗教的特質を観る一つの試みとして、「依正不二」観という一念三千の原理の一面を視座に、遺文の説示、並に諸先生方の研究を手がかりとして、聖人の内に「依正不二」の考え方が在ることを確認してきた。

「依正不二」の概念は、一念三千の法数中に既に国土世間が具備している故、一念三千の語を以て表現されて

いると思われるが、聖人の宗教活動の原理には、一念三千の働きの一つである「依正不二」が根本理念として在った為に、現実の世に『立正安国論』執筆として発動されたのである。

また小稿に於ては、吉凶両面の瑞相観と、仏土観のみに限定し断片的な考察をしてきたが、本覚思想との関連等様々な問題を取り上げて考察を加える必要があると思われるが、今回は以上に止め、今後の研究課題としたい。

註

文中引用の日蓮聖人遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』により、()内にその頁数を記した。

- (1) 茂田井教亨「日蓮聖人の思想」一五九頁（『日蓮の生涯と思想・講座日蓮2』所収）。その他、同『本尊抄講讀』上、小松邦彰「立正安国論小考」（『茂田井先生古稀記念日蓮教学の諸問題』所収）等参照。

- (2) 『天台大師全集』玄義六・三五三頁、また、『十不二門』（『大正新修大藏經』第四六卷七〇二頁）として刊行されている。日本天台の本覚思想に与えた影響も大きいと考え、浅井円道教授は、その著『上古日本天台本門思想史』に於て、十不二門的表現、殊に修性不二門・色心不

二門・依正不二門の発言を取挙げ、論点を整理されている。

- (3) 『天台大師全集』止観三・二七〇頁。

- (4) 『三世諸仏総勸文教相廃立』（一六九二頁）には「依正不二」との語句が見られる。

- (5) しかし、田村芳朗教授はその著『鎌倉新仏教思想の研究』の中で、あきらかに天台本覚思想を表示している遺文として、この文を挙げられていることも注意を要する。

- (6) 『安国論御勸由来』（四四二頁）、『安国論奥書』（四四三頁）、『法蓮鈔』（五五四頁）、『撰時抄』（一〇五三頁）、『清澄寺大衆中』（一一三四頁）、『下山御消息』（一三三〇頁）、『本尊問答鈔』（一五八二頁）等参照。

- (7) 『観心本尊抄』に「不_レ得_レ心有_レ現言_レ用_レ之。」（七〇六頁）とあり、『撰時抄』に「文證現證」「文證も現證もあとかたもなき真言経」（一〇二二頁）とある。又、『破良観等御書』（一一八四頁）参照。

- (8) 望月敏厚「観心本尊抄講義」（『日蓮聖人御遺文講義』三卷所収）二四六頁以下参照。

- (9) 浅井円道『観心本尊抄』（仏典講座38）一五三頁参照。